

チベットの悲劇

宮原 豊 (9 組)

『祖国を中国に奪われたチベット人が語る侵略に気づいていない日本人』

(発行:ハート出版、18年2月刊、1,600円+税)がよく売れているという。

タイトルは長いが、内容をそのまま単刀直入に表している。著者ペマ・ギャルポ氏は12歳で祖国を追われ来日52年、中国に侵略された祖国・チベットに愛郷の念を馳せ、チベット民族を憂いつつ、第二の祖国・日本への愛国と憂国の心情を吐露し、チベットと同じような目に遭わないようにと、能天気な日本人に強い警鐘を鳴らしている。

中華人民共和国(中国)成立の1949年10月直後に、中国のチベット侵略の巧妙な計画は始まった。1950年1月に「人民解放軍の基本的課題は、本年中にチベットを帝国主義者の手から“解放”することである」と宣言、帝国主義者の姿も見えないチベット内に人民解放軍が大挙して侵入してきた。1951年5月、事態を解決しようと派遣されたチベット政府代表団に、中国側はあらかじめ用意していた「十七か条協定」を

武力で齎して押し付け、その協定内容(例えば、自治権の尊重、宗教信仰の自由、チベット民族の言語・教育の発展等々)は後にことごとく破られるどころか、真逆の政策が推し進められ、ダライ・ラマ法王も国外に逃れざるを得なかった。最初から守るつもりもない欺瞞的な協定で、「侵略を解放」と強弁する中国の歴史捏造は常套手段、暴虐非道な“霸道”は今もますます巧妙かつ残酷に行われている。

17世紀以降、仏教国チベットは西欧の侵略を遮断するために鎖国政策を敷き独自の文明を築いてきたが、平和主義だけでは国は守れなかった。中国の侵入が過酷さを増す中、1950年代末に独立維持のために国連加盟を模索したが、「国連は本質的にキリスト教国の組織である」という一部の高僧の声に掻き消された。「チベットは国内の団結力が弱く、国際感覚のない一国平和主義、外交の不手際もあり、強大な武力の前に抵抗する術もなく、平和を祈る人々が無慈悲に大量殺害され、120万人も犠牲になった」。著者は、「日本人よ、中国の属国になってもいいのか?」と問い、「日本人には絶対に同じ悲劇を繰り返してほくはない」と強く訴えている。

一読に値する書であると思う。

最後に一言。前回紹介したインド独立のためにガンディーが主導した「非暴力抵抗運動」は、相手が英国だったから成功したとも言える。19世紀の帝国主義的植民地経営により英国も悪行非道の限りを尽くしたが、ガンディーは非暴力によりそれを国際世論に訴え、それが英国内のマスコミや世論を動かすことを計算していたかもしれない。しかし、相手が中国だったらどうだったのか。期待されるマスコミや世論は皆無で、中国共産党はやりたい放題。独立どころか、やはり国を滅ぼされていたのではないだろうか。本質を見誤らないようにしたい。(3月3日)

